

推薦のことば

小泉英明

Director, The International Council of Academies of Engineering and Technological Sciences

公益社団法人日本工学アカデミー 上級副会長

株式会社日立製作所 役員待遇フェロー

「あたたかい心を育む」との育児概念は、アプリカ創業者の葛西健蔵氏、漫画家の手塚治虫氏、そして愛育病院院長の内藤寿七郎先生のお三方のお考えから凝縮された珠玉の概念である。それは、葛西健蔵氏が書かれた「あたたかい心は幸せのために」というおよそ 200 文字の中に言い尽くされている。

内藤寿七郎先生には、葛西健蔵氏のご紹介で初めてお会いして以来、数多くの本質的なご指導を頂戴した。そして、2004 年にホテルオークラで収録した対談にお運び下さったのが、最後にお目にかかる機会となった。それ以降は、2007 年に 101 歳の天寿を全うされるまで、ほとんど外へお出ましにはならなかったと聞く。

育児研究者は、どれだけ時間を赤ちゃんと実際に過ごしたかということが、極めて重要である。「昭和最大の保母」と言われた斎藤公子先生は、重篤な脳障害を持つ赤ちゃんと一緒に添い寝を続け、夜中も一時とて赤ちゃんから離れることをしなかった。あるときはオランダから薫をも掴む思いで頼ってきた重篤な脳障害児の家族に自宅を提供した。ご自分はトタン屋根の仮住まいで長期生活を続け、トスカという仮死状態で生まれて上向・下降神経路（内包）が溶けてしまった赤ちゃんを、現在の医学では信じられない水準まで回復させた。座学の学者には真正面から厳しく対峙されたが、幼子の命や心を何よりも大切にされた。保育分野では知られていないが、斎藤公子先生は古生物学・進化生物学・哲学の専門家とご一緒に、『井尻正二選集全 10 巻』の編集委員を務められた碩学である。現在、再認識されつつある三木茂夫先生・井尻正二先生の深い哲学を、当時、即座に看破した数少ないお一人でもあった。

その斎藤公子先生が内藤寿七郎賞を受賞された際には、普段は一分の隙も見せない先生が、子どもに戻ったかのようにはしゃぎ喜ばれた。心底から内藤寿七郎先生を敬愛していた振る舞いが、今も目に焼き付いている。

科学の基本は、実態の仔細な観察と独創力である。内藤先生は常に在野に留まり、実践的な育児の研究に専念された。その研究は、赤ちゃんと母親の仔細な観察のみに留まらず、その背景にある脳の働きの重要性を看破された。内藤先生から直接伺ったお話によると、愛育病院の院長室に東京大学医学部生理

学教室の時実利彦教授を招き、脳と保育に関する内輪の研究会を開始された。日本が誇る世界に先駆けた研究の萌芽がそこにあった。未踏の領域への挑戦であったが、時実先生は道半ばにして逝去された。あまりに貴重な先生の遺稿は、お弟子さんらによって纏められ、逝去の翌年、『脳と保育』として雷鳥社から上梓された（1974）。歴史に残る先駆的名著である。世界の教育の潮流は、現在、「脳科学基調の教育・保育」に向かいつつあるが、その先駆けと言って良い（Hideaki Koizumi, Oxford University Press (2010)）。このように内藤寿七郎先生や斎藤公子先生は、自ら肌で感じながら赤ちゃんと母親にとって、最も望ましい育児を開拓された。巷間にはお薦めできかねる育児書も少なくないが、この『新「育児の原理」—あたたかい心を育てる—』は、そのまま実践に用いて一点の曇りもないと感じる。小児科学の世界的権威で、人間に関する学問に造詣の深い小林登先生が、監修の労を取られているのでなおさらである。

『育児の原理』の出版に当初から尽力されたのは、前述の葛西健蔵氏である。氏の情熱がなければ、このような貴重な書籍が世に出ることは無かったと思う。葛西健蔵氏にお世話になること多年に亘るが、氏の一途な情熱と実行力を心から尊敬し、また、敬愛して止むところがない。多くの不幸せな人々に手を差し伸べられ、そこから真の幸福とは何かを把握されたのではないかと拝察する。さらに、「幸福」を現実に掴むためには、「感動」こそ根源であると看破され、赤ちゃんや子どもたちに「感動」を齎すこと、そして「感動」できる子どもに育てることこそ肝要であると提唱された。さらに「あたたかい心」をすべてに優先する考え方は、混迷する世界にあって、霧の中の灯台のように、人間の進むべき方向を指し示すと思われる。

内藤先生も斎藤先生も、特に赤ちゃんと母親の「まなかい」（目交）を大切にされた。人間を除く動物同志は、目を見ることは敵愾心を示すことであるが、人間は互いに見詰め合うことが大切な信頼関係への入り口である。胎児は臍の緒で母親と結ばれ一つであるが（発達心理学の一項関係）、生まれ落ちると、やがて母親が他者であることに気付く時が来る（二項関係）。そのとき、「まなかい」を通して母親（養育者）と心が結ばれる。最初の他者を信頼することは、社会に対応するための第一歩となる。そこに愛着の絶大な意味がある。さらに、それぞれとは別の存在への眼差しが一致した時（別の他者や事物を共同注視する時）に、社会の始まりを知ることになる（三項関係）。この神経機序はまだ十分には解明されていない。「まなかい」については、通常の外側膝状体から視放線を通して大脳視覚野へ投射される系以外に、情動と深く関係する膝状対外視覚系が動いているのではないかと、仮説として私は考えている。

インドの古代哲学「ヴェーダ」には、口伝からパーリ語へと遺された「温かな心」（compassion/warmheartedness）の原点が見られる。それは仏教にも取

り入れられて「四無量心」と呼ばれるようになった。東洋哲学の泰斗、中村元先生は逝去される直前に最後の著作を残されたが、その書名は『温かなところ』であり、「東洋の理想」という副題がついている（1999）。中国の古典でも、特に孔子系列の哲学では、「徳」を重んじた。「徳」の要素である「仁」「義」「礼」「智」「信」のなかで、最も重要視されたのが「仁」であり、これも一言で尽くすならば「温かな心」であろう。さらに、西洋哲学のイマニュエル・カントも、最晩年の著作として『人倫の形而上学』を遺した（1797）。このなかで、最重要視されるのは「他者の幸福を自己の目的として推進する」であるが、これこそ「温かな心」である。この「温かな心を育む」ことこそ、古今東西を問わぬ育児・保育の究極の目的であり、葛西健蔵氏、手塚治虫氏、内藤寿七郎先生の共鳴から発せられた「育児の原理」であろう。

混迷する世界情勢のなかで、未来を確かなものにするために、「温かな心」は何よりも大切である。この『新「育児の原理」—あたたかい心を育てる—』は、必ずや新しい未来を拓くことになる。